
失ったモノ

遙風 霸鶴渡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失ったモノ

【Zマーク】

Z0676F

【作者名】

遙風 眇櫻渡

【あらすじ】

なんとなく生きる事に疲れていた大介。そんな彼は終電車の中で、氣味の悪い『娘さん』に出会うのだが……。

今日も、こんな時間になってしまった。

終電車に揺られながら、橋元大介は小さく舌打ちした。

まったく上司つて奴は面倒くさい。おじるでもなくダラダラと……。好きでも無い酒に付き合わされる、こいつの身にもなって欲しい。

ふつ、と息をついても慰めてくれる人間は居ない。妙に眩しく感じてしまう車両内には……大介と、隅っこで眠る泥酔した男以外には無い。

がつたんごとんと独特のリズムに、疲れきった身を任せて真っ暗な外の景色に目を移す。

ああ、明日も早いのにな……と思いつがい。

「ねえ、おじさん」

「つ?」

唐突にかけられた女の声に、大介はビクリと肩を縮める。声の方に

目を向けると、これまたびっくり。黒いふかふかのドレスに身を包んだ、白塗りの娘さんが立つて居た。

アメリカの人形みたいな氣色悪い睫毛まつげ、上りつくて鎖のジャラジャラしているブーツ……夜とは言え暑さの残るプチ熱帯夜には、いさか暑苦しい格好である。

……ドレスの所々に浮かんでいる、血液のしみの様なものも気に入る。

血糊ちのじだとは思うのだが、中々気持ちの良いものではない。

「ねえ、おじさん」

うだうだ考えている大介に、その娘さんはもう一度声をかける。笑みを含んだ様な氣味の悪い声に、身震いしながらも今度は返事をした。

「何か？」

不機嫌で顔を歪めた大介を見て、娘さんは満足そうに笑う。

「隣りに座つてもいい？」

「『血田』」

年齢不詳の若い娘さんは、底光りする瞳で微笑むと遠慮がちにふわつと……すぐ側に腰掛けた。

ああ……またく今夜は、ついてないな。普通の女の子なら和めるものを……。

おどろおどろしい彼女を横田で盗み見て、奥歯をきつりと噛み締める。電車はゆっくりと夜の深淵しんえんをつき進んでいく。身中の虫になど気にもとめずにして……。

「ああ、それゴスロリつていつんだよ?」

歪なハムエッグのトーストを頬張りながら、一人娘の駒子こまこが言った。

「うるさい?」

みつともなく欠伸あくびをしつつ新聞に目を通していた大介は、しばし顔を上げて駒子の説明を待つ。

「せう、ゴスロリ。結構昔からあるよ~ せつめいして、やりす
ぎはつくけど、小物とか可愛いのあるんだよね」

「お前もやつてんのか？血糊……」

「いやーだから、それやり過ぎの人でしょー。うわせこなあ

「ああむつー」と駒子は必死にトーストを食べかる。細い左手首の時計とこにらめつこしながら、味噌汁を搔きこんで……皿に涙を浮かべながら牛乳パックに口をつけた。

「行儀が悪いっ！」

妻の香苗かなえが駒子の頭をはたく。ぶつ、と口元を押される駒子……大介は溜め息をついて立ち上がるが、布巾で溢れた牛乳を拭き取る。

「なんだよつ、ババア！」

「何だつてええ？！」

二人がドタバタやり始める。

「おい、お前達……」

どうしようかと考へあぐねていると、助け船を出さように呼び鈴がなった。

「あ！ 竜君だ、行つてきまーす」

急にしおらしくなった駒子に、大介は苦笑してしまつ。こんなじゅじや馬娘も、一人前にお年頃らしい。

「はい、行つてらつしゃい。気をつけて」

母親らしい香苗の声。

大介は椅子に座ると、眼鏡を外して味噌汁をすすつた。

ほんのちよつとだけ仲間外れにされた様な、寂しい気分を飲み込むように……。

がつたんじとん、がつたんじとん……。

今夜も終電で、帰途につく。遊び疲れたらしい年若い女の子が、一人隅っこで寝ているだけで、車両内はガラガラだ。

大介はアルコールに毒された頭を振って、押し寄せてくる睡魔と闘う。

終電で寝過ごししたりしたら、最悪だ。

タクシー代程、もったいない金の使い道は無いのだから……。

首をガクガクいわせながら、夢と現の狭間をさまよいつ。

使えないで悪かつたな、メタボリック部長……。

『橋元さん、いなけりやあゝ新事業はなあ、上手くいってたんだある』

あんたの失敗だらうが、僕になすりつけやがつて……。

『だからあ、その年にもなつて平なんだよ、ひ・じ』

仕方がないだらう、これが……僕の実力なんだから。

なんだかなあ……自腹きつて、嫌いな酒飲んで、自身への文句を何故に聞かなければならんのだ？ 上司の機嫌をとらねばならんのだ？

ぐつぐつ沸き上がる感情に、頭がじんわり熱くなる。

いかん、いかん……悪酔いしてしまったみたいだ。

大介は涙を拭おうと田尻に手をやつた。ところが、その手を、ひんやりした女ものの手が掴む。

え？

「おじさんも行いりや」

昨日の娘さんの声がしたかと思つと……大介はぐいっと手を張られた。

「つな？」

「大丈夫、行いりや」

有無を言わさぬ平淡な声……。

ぐいっと、もう一度引っ張られた途端……奈落の底へ落ちてゆく様な感覚がして、大介の意識は遠退いた。

『ねえ、おじさん。ねえ、おじさん』

薄暗い森の中に、僕は立つて居た。狂暴に群がる木々の匂いが、頭をくらつかる……。ぼんやり手足の位置を確かめて自分に問い合わせる。

「何?」

僕は?

眉間に、しわを寄せても……何も思い出せない。空っぽの頭に苛立つた私は、すぐそこにある幹に、頭を打ち付けたい衝動にかられた。

『おじさん、おじさん』

風のやわめく音では無い。誰かが笛を吹いている様な……透明な声が木靈している。

私は、ぼうっと声の源を探した。

『君は?』

枯木が倒れて、広間になっている場所には、見覚えがある様な無いような娘さんが立っていた。

『名前は亡へましたの』

暗い雲の隙間から注ぐ月明かりを、その娘さんは……不自然なくらい綺麗な顔で受け止める。

『なくした?』

私の言葉に娘さんは無表情に頷く。

『じゃあ私は?』

『おじちゃんは、まだ』

手入れの行き届いた人形みたいな彼女の言葉に、私は顔をしかめた。

頭の中が、もんやりして苛々（いらいら）する。身体があることを忘れそうな不安定な感覚……おまけに自分が誰だかわからない、何をすれば良いのかもわからない……。

『じゃあ、僕は誰なんですか?』

不快感をあらわにした僕に、娘さんは赤い唇で弧を描く。

『必要なことよ。おじちゃんも亡くすんだから……解放されたいんでし

『へ、

『解放……？』

何故かその言葉は、甘美な響きを持っていた。

『わ、解放……』

繰り返した娘さんの、やんわりした囁きが……胸の内を支配していく。

『逝きませうへ、つこひめへ……』

そう微笑らつた娘さんは、軽やかに走り出す。僕は、まるで操られる様に……追いかけぬ。

『ねえ、おじさん！　あと一人なの。あと一人殺したら……私もやつと逝ける。ねえ、だから手伝ってね』

風の様に駆けながら、こちらに笑みを向ける娘さん。彼女の妖しげな微笑みに引き込まれて、僕は所在のハツキリしない足で、後を追い続ける。

蒼い水晶のような満ちた月が……黒いドレスを纏まどった、彼女の位置を教えてくれる。

もつゞれくらいうったろう？　何千本という木々の間を、通り抜けた気がする。しかし、全然息はあがらない。

別に足を動かさなくとも、走れるのではないか？　そう思えるぐらいいに飛びよつに進んだ。

『あと、もう少し。ほおうら、あれよ』

娘さんが足を止めて指さした先には、モップみたいな葉っぱに覆われた不健康そうな木があった。

その下で何かが蠢いている。

赤い何かが……。

赤いTシャツを着た人間が……。

『ほおづり、あいつ。あいつを殺して』

娘さんの囁きに、僕は首を傾げる。

『何か恨みもあるの?』

僕の質問に、彼女は二ヶコリ造りものの笑みを浮かべる。

『うん、殺されたの。だから復讐』

『何で自分で殺らないの?』

私の言葉に娘さんは首をふる。

『何度も枕元に立ったのよ。でも、あいつだけは無理だった。だから、生身のおじさんに頼んでるの』

『言つてることがわからない。生臭つて?』

娘さんは、ニッタリ笑つて答えてくれない。

『人殺しなんて出来ない』

『復讐して何が悪いの?』

『しかし……』

『あたしはね、バラバラにされたんだよ? あいつに殺された時点で、あいつを殺す権利もあるんだから』

ね? と小首をかしげる彼女に、何か釀然としないものを感じなが

「うむ、僕は頷いていた。

『はい、じゃあコレ』

娘さんが鋸びた丸型シャベルを差し出す。

僕は糸で引っ張られるかの様に、それを取り上げて男の元へと近付いて行く。

『死ね』

僕が出したはずの声は、娘さんのそれそのものだった。

「ぎゅう」と振り返った男の頭へ、シャベルを力任せにぶつかった。

枯れ草の上へ倒れこんだ男の腹に、ぐつさりシャベルを打ちこんでやると、娘さんはさつと満足気に拍手した。

『ありがとう。これで逝ける

そう言つて、晴れやかに僕の側までやつてくると、赤い唇を額に寄せた。

『約束通り、解放してあげる』

僕の前にもう一人の僕が現れる……。常ならば恐怖しただろうが、もうビリでもよくなっていた。

『じゃあお休み、おじさん』

弾む彼女の声を最後に、僕は真っ暗闇にほり出された。

ぱしぃん……と、虫でも潰す様な衝撃を頬に受け、意識が浮上する。

重い瞼を押し上げると、鬼の様な形相の香織が、大介の額を苦々しそうに見つめていた。

「か、母さん……？」

大介が片皿を見開くと、もう一発頬を叩かれた。

「お父さん、あたしを裏切ったねえっ？」

皿を叩り上げた香織は、重低音で喉を震わせる。

ベランダの窓から差し込む、淡い陽光に照らされる寝室。少し肌寒いが、いつも通りの朝だ。

大介はヒリック類をさすしながら、ぼんやり上体を起す。

いつの間にベッドに入ったのだろう？　どうやら昨夜は飲み過ぎたようだ。記憶が曖昧あいまいになるぐらいに……。何か夢を見た気もするのだが……。

「お父さん、浮氣したんでしょう？　おでこに口紅がついてるんだからー。」

そんなベタな……。

のつわらベッドを離れて、香織のドレッサーの鏡を覗いてみる。

「あれ、本当だ」

大介は無感動に、そう呟いた。

成る程、確かに口紅だ。血の様に深い赤色が、鮮明に唇の形を型どつている。

はて？

「いつの間についたんだろうな？」

とぼける様な大介の態度に、香織は激怒して金切り声をあげる。

「とぼけないで！ 昨日も深夜帰り、この前もそうだつたじゃない

つ？」

大介は両の掌を香織に向けて、まあまあまあと苦笑いする。

「本当に上司に付き合わされてるんだって。浜地部長の奥さんには、確認してみてくれよ」

『浜地』の名を聞いた香織は、唇を歪めてそっぽをむく。

「嫌よ、あの奥さん。お同氣取つてるんだからっ」

「僕だつて嫌な思いして、飲んできてるんだよ？ それくらい出来
るだろ」
「…」

面倒になつて部屋から出ようとした大介を、香織の鋭い視線が制す。

「仮にせうだとしても、その口紅は？ まさかキャバク……」

「居酒屋だから。大体そんなお金持つてないでしょ」
「…」

「でも……」と続けようとする香織を残して、大介は洗面所に向かう。

蛇口を捻り、勢いよく水を出す。頭のもやがかつたものをも洗い流すように、バシャバシャバシャバシャ顔を洗った。

そうして鏡に映った顔は、何かの抜け殻の様に見えた。

「それでね、後藤さんつたらつ……」

午後七時。

ニュースに集中しながら高野豆腐をつつく大介は、機嫌のなおった妻の話に適当な相づちを打っている。

浮気の嫌疑は晴れたらしい。まったく現金なものだ。

それでも腹が立たないのを不思議に思いながら、舌触りの良い米を口に運ぶ。

ニコースキヤスターは、今日も悲惨な出来事が沢山あつたのだと……大して感情のこもらない表情で伝えている。女児殺害、通り魔事件……。

だが、さして何も感じない……僕はこんなに薄情な人間だつただろうか。

いや違ひ……昨日まではそうじやなかつた。何かが……足りない?

視線を巡らせ考えてみる。いつもなら断れなかつた浜地部長の誘いも、今日は恐れることなくスッパリ断れた。今まで何故そうできなかつたのかが、わからない。ただ断る、それだけの事なのに。

『いや、憑物つきものが落ちたようだね。どうしたんだ今日は?』

そう、満面の笑みで大介を讃えたのは……普段は仏頂面をしている明石課長だった。

そつなく返した大介の肩を、

『浜地と代わつて貰おうかな、期待してるよ』

と、ぽんぽん叩いて去つて行つた。

憑物が落ちた？ 誉められた所で何も嬉しくもないのは……どうしてだらう？

わからない……。何か、大事なものを無くした様な気もするのだが……。
……。

僕は何を失つたのだらう？

「ただいま入りましたニユースです。N県山中にて、男性の変死体が発見されました。なお遺体の下からは、盗難届けの出でいた、高額なビスクドールをばらしたもののが発見されたため、N県警は……」
……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0676f/>

失ったモノ

2010年10月12日04時32分発行